



チバのキョウのケイカイゾ

博物館に
行ってみよう!

もっと知りたい!
千葉のおもしろ
博物館

第1回

千葉県立中央博物館(千葉市)

ウマソウ

インタビュー

“中の人”に
聞いてみました

実物の迫力を感じながら千葉の 自然と人間の調和が学べる場所

千葉県立中央博物館が開館したのは1989年です。開館の背景には、千葉で生物学、地学を研究している多くの研究者たちの長年にわたる強い要望がありました。千葉県の自然誌の研究はそれまでも盛んに行われてきましたが、集められた標本などをきちんと保存しておく施設がなく、貴重な標本や歴史を語る実物がやむなく県外に出てしまうことがありました。こうした千葉の貴重な財産をしっかりと保存していくため、研究者の長年の願いが実現し、開館される運びとなりました。現在、貴重な標本の保存はもちろん、これを皆さんにご覧いただき、千葉の自然や歴史、そして人とのかかわりを学べる貴重な場所となっています。

当館では常設展のほか、年に一度の特別展や春、秋の季節展なども行っています。約50名の研究員がいて、それぞれの専門分野の立場から企画を出し合い、来場者に常に楽しんでいただけるような展示を行っています。実はこうした企画展はどれも企画から調査、研究、交渉など約5年ほどの期間をかけて準備していますので、来場者の方々の反応にはいつもドキドキしています。春や夏にはお子さま方が大好きな恐竜や昆虫、秋には大人の方が楽しめる芸術関連の企画など、季節感も大切にしています。

博物館を楽しんでいただくコツは、まず自分の好きなジャンルや展示物を見つけていただくことも一つの方法ですね。好きなものをじっくり時間をかけて見ていただき、さらに知っていたと、そこからどんどん興味も広がっていくと思います。私も解説をさせていただくときは、来られた方に好きなもの、興味を持ってもらえるものを見つけていただくよう努めています。

素晴らしい千葉の自然と歴史を再発見していただく機会になると思います。ぜひご来館ください。



千葉県立中央博物館
主任上席研究員 御巫 由紀さん



▲常設展示室は房総の自然や歴史についてわかりやすく展示されています。

千葉県立中央博物館とは？

「房総の自然と人間」を常設展示の全体テーマとし、千葉県の自然と歴史について学べる総合博物館です。大迫力、実物大のナウマンゾウやクジラの骨格標本など見応えある展示物をはじめ、レプリカやジオラマ、映像などで房総の自然と歴史をわかりやすく紹介しています。体験学習室「たいけんのもり」では、動物のはく製や骨、化石などを実際に触ったり動かしたりしながら楽しく学べます。



マッコウクジラの骨格標本

大迫力のマッコウクジラがあるのは「生物の分類」の展示室。大きいことは知っているけど、実際に目の前にあるその骨格の巨大さにはただただあ然とするばかり。お子さまにもぜひ見せてあげたい本物でしか味わえない感覚です。

迫力の展示で千葉の自然と歴史を学べる4つのエリア

展示室は「房総の自然と人間」を全体テーマに、「房総の自然誌」「房総の歴史」「自然と人間のかかわり」の3つの主要な展示室と屋外の「生態園」に分かれています。

各エリアでは森や海など生き物が生活する場所が丸ごと再現されていて、自然の中で(生きるために)発見されにくいように生活する生き物を目を凝らして探すのも非常に面白い体験です。

地学専門の担当職員がぜひご覧いただきたいと説明するのは、「房総の地学」展示室にあるチバニアン期のコーナーですね。とても有名なチバニアン期ですが、それがどんな意義を持つものなのか、お子さんに聞かれると意外に説明するのが難しい。そんなお悩みを持つ親御さんがたくさん親子連れでお見えになり、解説ビデオで熱心に学ばれています。

ニホンジカのはく製



「房総の歴史」展示室

旧石器時代から現代にいたる房総の歴史をそれぞれの時代ごとに政治・経済・文化を中心に展示しています。銚子市常灯寺の木造薬師如来座像(重要文化財)や松戸市万満寺の木造金剛力士立像(重要文化財)等各時代を象徴する文化財(複製)も展示されています。



▲有吉北貝塚貝層断面。多くの貝殻の他に土器片も見ることができます。



▲約4,000年前のイルカ漁の様子を再現したジオラマです。



▲成田山新勝寺と門前町の模型。幕末のころの建物を再現しています。

●問い合わせ／千葉県立中央博物館

千葉市中央区青葉町955-2 TEL.043-265-3111

「房総の自然誌」展示室

「房総の自然誌」の分野はさらに「房総の地学」「房総の生物」「海洋」「生物の分類」「小動物」に分かれています。地層、陸の生物、海の生物などの実物(地層のはぎとり標本や生き物のはく製)などが展示され大きさや姿、毛や表面の質までもが「体感」できます。



◀「房総の地学」エリアにあるチバニアン期のコーナー。一番新しい地磁気逆転の記録が残り、時代を分ける境界がよくわかる地層として世界的に認められ、千葉にちなんで「チバニアン期」と命名されました。



▲清澄山のジオラマ。多様性の高い森林にさまざまな動物が生息している様子が分かります。



▲外房の磯のジオラマ。たくさんの種類の生物が、すみ分けている様子が観察できます。

「自然と人間のかかわり」展示室

博物館の大きなテーマである「自然と人間の調和・共存」の姿を学ぶことができるコーナーです。

展示物の一つ、谷津田の水源の姿や下総台地の谷津に沿った小規模な村の景観を再現した精巧なジオラマは、自然と深くかかわりながら暮らしてきた人間の姿を学べる素晴らしい展示です。



▲谷津田の水源である泉や周囲の林を再現したジオラマ。水神がまつられている様子も観察できます。

野外の博物館「生態園」

千葉県の自然の姿を身近に観察できる野外の観察地です。もともとある雑木林や池を活かしながら、千葉県で見ることのできる代表的な植物群落を再現しています。極力自然の状態での保存を目指し、生態園そのものが多様な生き物たちでかたちづけられた生態系になっています。



すごい!このホンモノを見逃すな!

ナウマンゾウの骨格標本

これ見て!



ナウマンゾウの名前の由来

ナウマンという名は、日本でゾウの化石をはじめて研究したエドムント・ナウマン博士(ドイツの地質学者)の名前で、博士の業績に敬意を表して「ナウマンゾウ」と名付けられました。

常設展示エリアである「房総の自然誌」の最初の展示室「房総の地学」に入るといきなり巨大な骨格標本がお出迎え。成田市猿山の約20万年前の地層から産出したほぼ完全な頭骨をもとに、神奈川県藤沢市産の背骨や肋骨、肩甲骨、^{かんこつ}寛骨などの骨を用いて再現されたナウマンゾウの全身骨格です。肩の高さは2.7m。組み立てられた状態の骨格標本では最大のものと言われています。頭骨には大きなキバの根元が残されており、ここからオスの年取ったナウマンゾウであったのではと考えられています。

よく古代の大きな陸上の生き物の代表としてマンモスが登場します。特にシベリア周辺に生息したケナガマンモスが有名で、ナウマンゾウとは生きていた時代もほぼ同じでしたが、ケナガマンモスはより寒い環境に適応した種類です。

ナウマンゾウは約40万年前に出現したゾウで、千葉県をはじめ日本全国から化石が産出しています。つまり大昔、この日本の地にゾウが歩いていました!ということです。とても驚きです。

企画展も見てみよう!

これまで、こんなおもしろ企画展もやっていました



【万祝博覧会 海をまとう】

万祝とは、大漁や進水など漁業の慶事を祝って作られる着物。大漁祝いの儀礼と習俗、海を通じた地域交流、染色技術とデザイン、民芸蒐集品、美術の題材など、万祝をめぐるさまざまな視点を紹介。青森から静岡まで各地域に残る「万祝」が一堂に会しました。



【理科室のタイムマシン 学校標本】

歴史のある学校の理科室・生物室には今でも貴重な古い剥製や標本が残っています。展示では県内11校の高校などに保存されている貴重な古い剥製・標本約100点を展示。これらの標本調査から得られた新たな知見や、標本を用いた学校教育の歴史をひもときました。

《もっと知りたい! 千葉のおもしろ博物館》今月の誌上クイズ

※答えは、京葉銀行のホームページにある、「もっと知りたい! 千葉のおもしろ博物館」の第1回をご覧ください。



今回誌面でご紹介した、ナウマンゾウの巨大な骨格標本ですが、このナウマンゾウの名前の由来は何でしょうか。

次の3つの中から正解を1つ選んでください。

- ① 化石が発掘された場所の名前
- ② 化石を発掘した人の名前
- ③ 化石を研究した人の名前

取材協力・撮影協力・写真提供/千葉県立中央博物館

プラスαで、未来とともに。

京葉銀行

ホームページでもご覧いただけます。

京葉銀行 情報誌

検索

LINE、Xからも「もっと知りたい! 千葉のおもしろ博物館」を配信しています。

LINE 公式アカウント

@keiyobk_official



X 公式アカウント

@keiyobkofficial



2025.1
(次回発行予定/
2025年2月20日)

正解は→③ 化石を研究した人の名前